



サムシング・グレート (something great)

宇宙の成り立ちは、今から百三十七億年くらいの昔に、極めて小さな一点が大爆発（ビッグ・バン）を起こしたことに始まったとされている。

その直後に生じた水素原子が物質の原点だといわれているが、さて「生命」はどのようにして生まれてきたのか。

ダーウィンの進化論では、生物のそれぞれの種は、極めて簡単な原子生物から進化してきたものと説明するが、その原初の「生命」の誕生についての科学的説明はない。

科学者たちは、今ではいろいろな人工臓器を作ること成功してきたが、世界中の優れた技術や学者をすべて動員しても、また世界中の富をすべて使ったとしても、細胞や細菌の一つすらゼロから作ることができない。

人間の体の中にある数十兆の細胞のそれぞれの核の中の極めて小さな空間に万卷の書に匹敵する遺伝子情報が書き込まれ、一刻の休みもなく協力し合って働き続けている力には、大自然の素晴らしさにただただ驚嘆するほかはない。

その大自然の素晴らしさを説明するためにダーウィンの進化論に対抗して、「生命の精妙な発展は何者かによる『知的な計らい』で方向付けられている」とする「インテリジェントデザイン（知的な設計）論」も展開されてきている。

また多くの宗教や神話では、「人間を始め生物は神の手によって作られた」と説明されている。

しかし、生命誕生の謎を解くキー（key）として「神」とか「仏」などを考えることについては信仰を持っていない人や科学者からは拒絶反応が強い。

生命科学の研究に五十年間従事してこられた筑波大学名誉教授の村上和惟氏は、研究の過程で、「大自然の不思議な法則と秩序」を感じ取って、生命の活動についても「目に見えない何者か」の力によるものと考え、それを万人に分かり易く受け入れられるように「サムシング・グレート」と名付けた。

人間の力を超えた「何者か」に対する敬虔な気持ちを持つことによって初めて生命の謎が解き明かされる。

天台宗を開いた最澄が「山川草木悉皆成仏」を唱導した如く「自然信仰」は古くから日本人の心に宿っていたのであって、日本人は花鳥風月を愛で、人間の力を超えた自然を畏敬し、自然に対して謙虚な気持ちを抱いていた。

西行法師が伊勢神宮を参拝した時に「何事のおわしますかは知らねどもかたじけなさは涙こぼる」と詠んだのも、伊勢の神域に人間を超える「サムシング・グレート」を感じ取ったからであろう。

自然への畏敬の念、気高く美しいものへの憧れ、自らにまさるものへの敬虔な気持ちなどは日本人の心の根底にある意識であった。

こうした「サムシング・グレート」なものに対する敬虔な気持ちを持つことができれば、敬老精神や親孝行の気持ちも育まれ、更に社会公共への奉仕精神や他への配慮の気持ちを持つこともでき、只今の極端な利己的社会におけるモラル崩壊現象もおのずから是正されることとなるのではないか。